

G.H. ミードの社会哲学 II

小 川 英 司

つい最近、メディア等でブラックホールの写真が撮れたと大騒ぎになったが、ブラックホールというのは、それこそ光さえ呑み込んでしまうからブラックなのであって、本来視覚にとらえられるものではなく、だから周辺にある物質が映って映像が欠落した中心部分がブラックホールと特定されるのである。それは画期的なことであるが、もっと興味深いのは、この写真によって一般相対性理論が立証されたと報道されたことである。専門家に聞いてみないと本当のところは分からないが、重要なのは、理論が写真という知覚的経験によって立証される、と門外漢だけでなく科学者も考えている様子であることだ。

前稿では、科学者はどんなに抽象的な理論に立脚しているとしても、観察と実験という段階においてはかならず知覚的経験に頼らざるをえない、とミードが再三にわたって論じているのを見たが、まさにこの写真騒ぎこそミードの立論を大げさに立証しているように見える。またミードが黒い輻射という例えをだしていることも思いだしてほしい。黒い輻射とブラックホール。筆者はこの騒ぎを見て大変興味深く感じた。

「相対論こそ、こうした事態（知覚の世界と科学の世界とが親和的だった事態、筆者）を完全に変えたのである。ミンコフスキー時空の幾何学においては、知覚的な運動は現われない。エーテルはなくなり、出来事が物的事象に取って代わったのである。時間は空間に同化され、それ独自の空間的な準拠枠をもっていた精神は、こうした時空のなかに見境もなく飛び込んでいったわけだが、そうした時空がもつ湾曲は、重力定数に対応しているのである。こうしたことの結果として、知覚と知覚的想起の世界の全体が、変換式によって示されるパターンと、四次元時空における出来事および出来事間の間

隙との論理的な相関関係しか表わさないパースペクティブに収斂してしまったのである。定義上、出来事と出来事間の間隙というのは、どんな経験にも属さないのである。われわれがそれらに到達するのは、認識過程において指し示すことのできない何ものかにしたがうことによって、つまり蓋然性の理論によってなのである。われわれは、科学的経験を数学的に定式化することによって、経験不能な実体やそれら相互の諸関係を指し示す暗号を手に入れたのだった。そして、こうした論理の実体の本質構造こそ、われわれの願望を、すなわちわれわれにとって自明な相対的な経験が帰属するとされる究極的な現実への願望を満たすのである」(1)。

20世紀の物理学の画期的発展としては、アインシュタインの相対性理論とハイゼンベルクの量子力学があげられるが、ここではミードは相対論にしばって論じている。ミンコフスキーというのは、アインシュタインの先生で彼の特殊相対性理論の四次元時空を非ユークリッド幾何学で描写することで特殊相対論の受容をひろめた数学者である。ここではじめて時間という変化の本質的契機が空間化され、知覚的世界が排除されたのである。物的事象に満ち満ちた人間的知覚的世界は高度に数学化抽象化された世界に取って代わられた。ミードはわれわれという人称代名詞を頻繁に使うが、これはもちろん自分の立場を示す場合もあるが、科学者も含めた人間社会全体を指すことも多い。だから、科学を批判的に論ずることで自らの立場を明らかにする場合もあるし、現に流通している科学理論に伴奏するようなかたちで現実の科学的発展の世界を明らかにする場合もある。話しをもどすと、相対論の四次元時空においては時間が空間化されるので、知覚と知覚的想起の世界の居場所がなくなる。その代わりにさまざまな変換式が現実の座を占めるようになる。そうすると、知覚的世界を構成していた人間的な世界は逆に抽象化され、数式が現実化する。ただ、これはどんな経験にも属さないで抽象物にすぎず人間の現実になることはない。ただ、物理学や科学は現に存在しているので、これを真正面から否定することはできない。それらを否定せず自らの世界像をぶつける以外に術はないのだ。さて、ミードはこのあたりで反撃に転

ずる。

「けれども、科学者の手続きがどんなに遠いところまで行っても、それは、変換、あるいは可能的な変換が行われる状況を除けば、どんな状況にも到達できないのである。もしあらゆる変換の背後にあるものを問い質せば、そのときわれわれは、現実的なものであれ想像上のものであれ、どんな経験にも属さないものを問い質していることになる。たとえば、われわれは、人間の経験に先立って存在する宇宙の発展段階を定式化するが、それでもそれらは想像力のなかで、内部の目や少なくとも精神の眼前に姿を表わすのである。もし想像力をなくしてしまえば、記号分析という抽象物しか残らないが、それは私がいままで示した変換式と同じ論理的性質を備えたものなのである。もし私がある色の名を言い、その色を私の精神にとって普遍的な意味においてとらえるなら、そのとき私は、他のあらゆる視覚経験を現在の経験に収斂させるものを取りだしていることになるのである。もちろん、その場合、この経験が事物の聴覚的、感覚的性質とは異なった視覚的性質に支配されているかぎりだが。目にとって存在するあらゆる感覚性質にたいして、共通の働きかけ方があり、それはちょうど耳にとって存在する感覚性質にたいして、別の働きかけ方が存在するのと同様である。そして、こうした典型的な反応を取りだすことによって、私の赤色にたいする行為を青色に「変換する」ことが可能になる。もちろん、その場合も、私があるときには色に反応し、別のときには音に反応できるかぎりであるが」(2)。

四次元時空のなかで起きるのは、時間が空間化されているので出来事だけであるが、これら出来事の間にあるのは変換式によってもたらされる変換だけである。これら変換の背後には何も存在せず、したがって経験とは無縁な単なる数式の羅列である。だから物理学の対象は知覚の対象ではないはずだが、先のブラックホールの例でも見たように科学者たちは対象が確かに知覚されたとはしゃぐのである。観察と実験という科学にとって要となるところで知覚的経験に大いに依存するにもかかわらず、知覚的経験によって立証する当の理論が経験とは無縁な存在なのである。知覚は人間の現実を形成する

要となるものだが、人間の現実を拡張発展させてきた当の科学において、観察の場合を除いて、このように等閑視されているのである。経験とは無縁な理論を立証するのに経験に訴えるという事態なのだ。もちろん、科学者は最後には知覚的经验に訴えざるをえないので、すべてを主観性のなかに収斂させてしまう観念論哲学よりは現実的で健全なのだが。この四次元連続体というのは、運動とも変化ともまったく係わりのない幾何学的決定論なのである。そして、これはどんな可能的経験とも無縁である。言ってみれば科学の世界のなかに現われた本質や普遍や永遠の対象の世界であるが、これらは本来形而上学のカテゴリーであって科学とは無縁であったはずだ。

「こうしたことは、すべて次のことに帰着する。すなわち、時間と空間を分離することこそ、運動を知覚する際に決定的なことなのである。運動を生じさせる無時間的な空間がなければならない。けれども、無時間的な空間は、個人や知覚可能な出来事が、静止しているのか、運動しているのかによって異なったものになってくるのである。たとえば、列車に乗っている場合、もしわれわれが、列車のなかの個室という空間から風景のなかの空間に自分自身を置き換えるなら、列車のなかの個室空間の方が動いていることになり、したがって列車のなかの空間は、測定しようとするなら、風景のなかの空間とは異なった単位によって測定されることになるのである。これは時間についても当てはまる。時間と空間が相互に係わりをもったものなら、両者の構造的な特徴は、個人の時間的パースペクティブと呼びうるようなもの次第で異なったものになるのである。そして、ホワイトヘッドが主張したように、こうした差異は自然自体に備わったものなのである。それらは主観的なものではない。けれども、科学者は、ひとつの状態からもうひとつ別の状態への変換を扱うだけで満足してしまう。科学者は、時空幾何学を受け入れようと受け入れまいと、こうした変換にもっぱら係わり合うだけで、超越的な時空という前提を必要とはしないのである」(3)。

ミードにおいて変化＝新奇性の創発こそ世界の本質であって、時間が空間化された四次元連続体という幾何学的決定論は受け入れられない。だから

ら、変化をもたらす運動が生じる無時間的な空間がなければならない。たとえば、変換式をあやつる科学者は、その考えの背後に幾何学的決定論にもとづいた世界像が隠されていることに頓着しないで、ひとつの状態が別のひとつの状態に変換されればそれで満足してしまうのである。世界像を問題にすることはない。ミードはこれを問題視していて、自らの世界像を展開しようとするのである。そこで鍵となるのがミード独自の現実性論なのだが、その現実性論の中心をなすのが物的事象という概念である。

2 物的事象 (physical thing)

これまでに何度も物的事象という概念がでてきたが、これを詳細に論じる余地がなかった。以下では、『現在の哲学』に収められた論文「物的事象」にもとづいてこの概念の内容と意義を論じたいと思う。近代の常識に立脚するとかなり奇異な内容であるが、そこまでしないと新しい世界像の提起など到底できないだろう。さて、次の文章から始めよう。

「テーブルに手をのせると、手とテーブルを同時に経験することになる。テーブルに押しつける力と同じ抵抗がテーブルから返ってくる。手を押し返してくるテーブルがなければ、抵抗感を感じることはできない。手が痛くなるほど押しつけても、テーブルが示す抵抗は、テーブルに加えられている抵抗と同じものなのである。こういう場合、経験はテーブルと手の間に分割されているのである。したがって、テーブルにかかっている圧力を経験するためには、自分自身をテーブルの態度のなかに置かなければならないのである」。また、「現実存在するものとは、われわれが、実際にあるいは象徴的に掴むことができるもののことなのであり、「対象がわれわれにとっての対象になるのは、われわれがその対象の態度を取得するときだけなのである」(4)。

近代以降の常識人から見るとなやら世迷言のように見えるが、ミードは主観と客観の分裂を乗り越えようと新たな現実性を提示するのに真剣である。ここで役割取得 (taking role) という概念がでてきたが、これはやはり

ミードの体系における鍵概念である。通常は他者の役割取得 (taking role of the other) というかたちで用いられるのだが、これで社会過程における自我の生成が論じられる。これについては後に詳細に論じるが、とにかく他者の役割取得という機制が第一にあってそこから物の役割取得、物的事象の成立というのが論理的な順序である。幼児の眼前にはいつも親しい人、とりわけ母親が存在するが、それ以外にも父親や兄弟親戚が存在するが、つねにこちらに向かって対応してくる。つまり、幼児の前にはつねに他者が存在していて愛情を注がれている。それも複数の他者がいる。この段階では幼児はまだ世界の中心であって、自分自身が対象化されていない。幼児は、成長していつしか自分自身も周りにいる人たちと同じ存在だと気づく。つまり、幼児は他者を鏡にして自分自身を映すのだが、ここにいたって大勢のなかの一人という自覚をもつのである。ここで自己の対象化の第一歩が進む。幼児の名前を呼びながら親しく接してくる他者たちを媒介にして自己にいたる。だから、幼児は、自分のことを僕や私といった一人称代名詞では呼ばず、いつも他者に呼ばれているように「なんとか」ちゃんと呼ぶのである。自己の対象化が初期の段階なのでこうなるが、さらにこの機制が進むとようやく一人称で自分自身を呼ぶことができるようになるのである。こういった機制の根底にあるのが他者の役割取得である。自分の相手をしてくれる他者の役割を取得して自分自身を相手にするようになるのである。

「物的事象は、操作の経験や離隔経験において示されるが、このことは同時に、物的事象としての有機体にも当てはまるにちがいない。有機体は目にしたり、感じられたりするものである。われわれは、ものを見るときは、鏡に映るものや視覚イメージによって、直接目に入ってくるものを補っているが、手の場合は、身体的全表面に実際に触ることができる。筋肉の運動や内臓の動きを自分自身の内部に生じたものとして経験するのは、われわれ自身が外部を獲得してはじめて可能になるのである。われわれは、互いにおつかり合う身体を経験する際には、身体の表面にかかる圧力にもとづいてそうしているのだが、これが可能になるのは、身体とそれ以外の対象が、物的事象

という共通の場のなかで組織化されている場合にかぎられるのである。接触で経験する物の表面と、この表面が押し返してくることによって得られる有機的経験とが、幼児の経験において、物の外部と内部を区分けさせる経験になるのは疑いない。けれども、子供が自分の身体の表面を他から区別するのは、自分の身体によってではなく、物によってのみ可能になるのである。したがって、子供は、他から区分けされた有機体としての自己に達する以前には、物の表面に到達できるだけであって、自分の身体に達することはできないのである。発生論的に見れば、幼児は、周縁から中心に向かうことで、自分の身体に達するのである。もし子供が、物に内部をもたせようとして、有機体の圧力を用いようとするなら、その場合身体は、あらかじめ物との接触によって、明確なものとしてとらえられていなければならない。こうしたことは、物的事象と物的事象としての身体との関係、そして身体以外の物的事象間の関係として、引き続き経験され続けるが、この点を認識することは重要である。われわれは、分析を通じて、物の内部に入っていくが、それは新しい外部に達することによってのみ可能になるのである。そして、この新しい外部は、身体か、またはそれ以外の物的事象の内部に生じるものとしての圧力経験にたいして、実際のあるいは想像上の条件になるのである」(5)。

先に示したように、幼児は有意義な他者の役割取得の機制によって自分自身を対象化できるようになり、これが自我の萌芽になるのであるが、役割取得は物の世界にまでおよんで物の役割取得を通じて物の対象性を獲得する。このときに鍵になるのが手の役割である。前稿でも述べたが、近代の哲学は視覚優位の哲学であって、接触などという原初的なものが対象性の成立に鍵になるなどというのは笑止千万であって、ここに、西洋形而上学の克服と同時に近代の克服も目指すミードの議論のユニークさを認めていだろう。

それはさておき、物の対象性を獲得できるなら自分を物として対象化することもできるはずである。ところが、身体というもっとも身近なものを対象化するためには、幼児はその前に外部を獲得できていなければならない。自我の生成のときと同じように、内部から始まるのではなく、外部から、つ

まり有意味な他者という外部を獲得してからようやく自分自身を対象化できるように、幼児はまず外部の物の世界を獲得してから自分の身体という内部に向かうのである。その場合、自分の身体というものを首尾よく対象化できたときというのは、自分自身を物的事象としてとらえられているときである。つまり、外部にある物的事象と自分自身の身体という物的事象が通約可能なものとして共通なものとして組織化されてはじめて身体は物として把握されるのである。この端緒になるのが、幼児がさまざまな物に接触するときを感じる圧力である。最初の引用でもしめされているが、物に圧力をかけると当然のように物は押し返してくる。これは単に圧力にたいする反作用にすぎない、というのは科学的知識をたずさえた立派な自我の反応にすぎない。幼児がまず成長の過程で経験するのは押せば押し返してくる経験なのであって、これが原初的なものなのだ。こうした経験から幼児は物の役割を取得して物の内部というものを獲得するのである。こうした接触経験をかさねることで幼児は外界の物の世界を獲得するのであるが、自我の獲得のときと同じように、これが自分自身に跳ね返って自分を物として把握し、自分自身と外界のものの区別が明瞭にできるようになるのだ。

「したがって、一連の物的事象は、それらがもつ表面によって明確化されるわけだが、そうしたもののなかで、身体としての有機体も、同じように明確化されるのである。たとえば、もしわれわれが、物の色や肌触りを、有機体内部の生理過程に依存するものとして見るならば、当の有機体も含めた物的事象を定義可能なものとして前提にするような議論に陥ってしまう。経験においては、身体としての有機体に帰属する現実には何の優先性もないのである。眼前のテーブルのなかに手を突っ込むことが考えられるなら、自分の足に手を突っ込むことも同様に考えられるのだ。こうした物的事象は、すべて離隔経験なのである。」(6)。

経験というと常識的には明確な自我を備えた主体によるものと思念されるが、ミードにおいて経験はまず有機体としての幼児から出発するので、経験がすべて主体の意識に帰属するという体裁をとらない。生を保全しようとす

る有機体というものがすべての出発点なのだ。有機体としての幼児が行う接触経験があらゆる経験のはじまりなのである。幼児が成長するとかれの周りには物的事象が現われるが、これが、自我の生成の場合と同じように、自分の方に跳ね返って自分自身の身体を物的事象と把握するようになる。そして、離隔対象としての物的事象はさまざまに存在する視覚のパースペクティブにおいて組織化されており、というか視覚のパースペクティブにおいて組織化されることで離隔対象として存在している。ただ離隔対象が把握され知覚されるのは、操作領域という媒介を経たうえである。

「操作領域のなかでは、対象は、知覚主体である有機体に働きかけるが、それは、有機体に対する対象の量的な圧力を意味する。こうした対象による働きかけ、その温度、匂いなどといった特質は、それ以外にも無数にある。けれども、これらはすべて、重さをもったひとつの物としての特質であり、われわれは、目に見える物の表面を分割することによっては、物的事象の内部の性質をとらえることは決してできないのである。もともと有機体のものでしかない内容が、物的事象のなかに生じるのだが、これはホワイトヘッドが物の pushiness と呼んだ圧力の内容である。したがって、これがどのように事物のなかに入っていくのかということが問題になる。直接的な経験においては、離隔して見る映像と接触して得る触覚が共存している。私はなにも、内的経験から外部の世界にどうしたら辿りつけるのか、といった形而上学的な問題を考えているわけではない。それ自体の輪郭をもった離隔対象が、知覚対象としての内部を、すなわち分割することによっては決してとらえられない内部をどのように獲得するのか、これを考えているのである。私がすでに述べたことだが、身体表面相互の圧力は、たとえば片方の掌にたいするもう一方の掌の圧力というかたちで表わすことができるが、これが対象に移入されるのである。したがって、私が提起している問題は、この移入がどのように行われるのかということである」(7)。

物的事象の内部はいかに獲得されるのかという話したが、物的事象は内部をもたなければ対象として存立しえない。それが有機体に跳ね返って有機体

が自分自身を物的事象として把握することもない。物は表面を実際にあるいは想像上でいくら分割しても内部に辿りつくことはできない。

「私がこの問題に答えられる唯一の回答は、有機体は、物を握ったり押したりする際に、自分の努力を物の接触経験と同一視しているから、というものである。有機体は、自分自身の努力によってそうした接触経験を積んでいるのである。硬い対象を掴むときというのは、自分自身を刺激して、物を掴もうとする自分の努力を引きだそうとしているのである。人が自分のなかにある種の行為を呼び起こす場合、それは同時に物の内側からも生じてくるのである。そうした働きかけは物からも生じてくるのである。なぜなら、接触経験は、身体の働きかけが、有機体にたいしてだけでなく、知覚世界のなかでのそれ以外の物にたいしても及ぼされることによって積まれていくからである。有機体の対象は、有機体のなかに、有機体にたいする対象の働きかけを呼び起こし、したがって対象にそうした圧力の内的性質が授けられ、物的事象の内部がかたちづくられるようになるのである。物がこうした内部を獲得するのは、有機体が物の態度を取得する場合にかぎられるのである」(8)。

懸案である物的事象がどのように内部をもつのか、ミード自身の言葉で詳細に述べられている。幼児は、物に圧力をかけるときに自分が働きかけた力と同じものが物から働きかけられると感じる。物にたいする自分の行為が物による自分への行為ととらえられる。そうして、物にも内部が生じることになる。なぜなら、こちらに働き返してくるからだ。こういった体験が幼児の成長につれて積み重ねられ、他者にたいする役割取得を通じて自我の萌芽が生じてくるのと同じように、物に内部が獲得され、直に接触しないまでも物的対象として離隔経験が行われるようになる。つまり、幼児は、人の役割取得によって自我の萌芽をもつように、物の枠割取得によって物の内部を獲得し物的事象を獲得するのである。物は、働きかけると働き返してくるので物も態度をもっているのである。

さらにミード自身に説明してもらおう。「こうした過程を定式化してみよう。物は、有機体を刺激して行為させるが、それは物が有機体に働きかける

ように行われる。また、物が及ぼす働きというのは、硬い対象を掌にしっかりと握りしめる場合に生じるような圧力にたいして、有機体が感じる抵抗と同じものである。対象の抵抗とは、手の働きかけの線上にあるものののだ。幼児の成長においては、こうした経験をの方が、有機体として自分の肉体全体を経験するより早いに違いない。幼児は、こうした働きかけが自分自身のものだと認めるようになる前に、自分の内部で生じる努力を物のなかに位置づけていかなければならない。幼児の回りにあるものは、あらゆる方向に広がっているが、そのなかから色のついた形あるものがひとつの世界のなかに親密なものとして位置づけられ、そのなかで幼児の身体が最終的にある明確な場を占めるようになるのである。そうするなかで、身体の圧力と掌の把握力が、物を身体の内部の態度から区別して特定の場を占めるものとして提示しなければならず、そうして幼児は最終的に、自分にたいする物の働きかけを通じて、ひとつの事物としての自分自身に至るのである。物質とは、こうした物の性質にわれわれが与える名称のことであり、それが呼び起こす反応のことなのである」(9)。

ミードの物質概念が明示されている。実際は幼児の働きかけが物の方に投影されて物が物として認識される、と考えてはならない。これでは自我主体の立場からの考え方だからだ。物はあくまで物の方から幼児に働きかけてくるのであり、これを幼児が経験の蓄積によって、自分の努力と区別できるようになってはじめて物は自立した物として、つまり物的事象として成立するのである。物の方からくる働きかけというのは、有機体である幼児が何か硬いものを握りしめたときに感じる物の抵抗と同じである。ここで幼児は物の役割取得を行って物に内部が獲得される。つまり、自分の身体を物としてとらえる前にこうした経験が先行する。繰り返すが、これが自分に跳ね返って自分自身の内部を獲得し、物的事象としてとらえられるようになる。物の働きかけは実際は幼児自身の努力なのだが、そう認識する前に幼児はこの働きかけを物のなかに位置づける。そして外部の物の内部から始まってこれが自分の方に跳ね返って自分を物的事象として把握すると同時に、外部の物たち

が物的事象として自立していくのである。幼児は、さらに経験を積むと、自分の身体内部の態度を物とは別のものとしてとらえ、物をよそよそしい特定の物としてとらえ、そうして自分もひとつの物としてとらえるのである。こうしたことすべての過程が呼び起こす反応こそ物質なのである。物とは反応のことなのだ。

「いまや、先に示した問題に答える場に立っていると言えよう。われわれは、どのようにして、離隔した物を、操作領域において物的価値をもつものとしてとらえられるようになるのだろうか。質問の仕方を変えてみよう。空間の同質性をもたらす経験的背景とは何だろうか。まず第一に、物に働きかける経験と物的事象そのものが持続することによって、物質内部の性質が同じものとしてとらえられるようになるが、そうした性質は、離隔経験がそのうちに接触経験を含みもつことで完成されるときはいつでも認識されるものである。第二に、こうした物質内部の性質は、それが物にたいして働きかける反応を呼び起こす場合にかぎって存在するのである。離隔対象は、物を掴んだり操作したりする反応を準備させることによって、有機体のなかにその物特有の内部的な抵抗感を呼び起こす。こうしたところに、リップスの感情移入のよりどころがあるのだ。けれども、物質のこうした内的性質を、有機体によって行われる、対象にたいする作用感覚の移入だと見なすのは誤りである。抵抗は、物にたいする働きかけが有機体のなかにあるのと同じように、物のなかにあるのだが、それでも抵抗が存在するのは、その物以外の物の働きかけや作用にたいしてだけである。働きかけ合う場のなかでは、作用と反作用は等しい。物の内部の性質は、もちろん有機体がいるおかげで、すなわち物にたいする働きかけと物の抵抗が持続するおかげで存在するのである。けれども、こうした物の内部性の性質が生じるのは、有機体が対象として現われることによってのみ可能になるのである。つまり、有機体が表面と経験をもつものとして、すなわち輪郭をもった表面の内部にあるものとして明らかにされることによってのみ可能になるのである。私が強調したいのは、物的事象は、接触したときの圧力によって、また離隔しているときに操

作反応の先取りを呼び覚ますことによって、その物特有の内的性質と同じものを有機体のなかに呼び起こすことであり、したがって、物がもたらす作用は、有機体の反応と同じものである。こうしたことこそ、有機体が自分自身や自分の操作領域をどのような離隔対象にも位置づけ、操作領域の場を無限に広げることが可能にする。こうして有機体は、種々雑多なパースペクティブから同質的な空間へ到達するようになるのである。本質的なことは、物的事象は、それ特有の抵抗反応を有機体のなかに呼び起こし、また物質としての有機体も、物的事象が作用するように物に働きかけるということである」(10)。

操作領域において物は特定の物として把握されるが、操作領域が成立しているのは等質空間においてである。物は先に示したように内部をもつようになるが、こうした段階から物は有機体にたいして物に働きかける反応を、操作領域という等質空間において呼び起こすのである。これらは接触経験の積み重ねで生じた離隔対象として存在する。離隔対象として存在していても物は有機体のなかにその物特有の内部的な抵抗感を呼び起こす。これは幼児が物のなかに移入する抵抗感ではない。物にたいする働きかけは、幼児の側に確かにあるが、物のなかにも現存する。これがミード独特の考えで、もとはといえば幼児の努力によって生じた抵抗感や圧力感であるのだが、これが物のなかに移入されるのではなく、物そのものがこうしたものをもつと考えるのである。有機体としての幼児の発生段階から人間的現実を描きだすのでこうした論法になるのである。移入されると考えるのは、近代的な主客二元論に立脚した自我主体の論法なのだ。物の抵抗感は確かに物の内部に存在する。

先に示したように、幼児は物の内部を獲得することで自分自身を物としてとらえるが、逆に言えば、有機体としての幼児がほかから切り離され内部をもった対象として存在するから物の内部性が明らかになるのである。物的事象は、接触しているときは圧力を感じさせ、離隔しているときは操作反応を先取りさせるが、こうしたときというのは物的事象そのものの内的性質と同

じものを有機体の内部に呼び起こしているのである。したがって、物的事象がもたらす作用は、有機体の反応と同じなのである。こうした過程を通じて有機体は、あらゆる離隔対象を、まだ見たことのないものも含めて、自分と自分の操作領域のなかに位置づけられるようになる。こうしたことの結果、どんな離隔対象も自らの操作領域のなかに引き入れることができるので、同質的な空間が成立する。こうした空間のなかで有機体と離隔対象は対等な立場に立つ。すなわち、物的事象は、それ特有の抵抗反応を有機体のなかに呼び起こすが、同時に物としての有機体も、物的事象が作用するように物に働きかけるのである。

同じ論点だがさらに続ける。「いままで述べてきたことのなかから、さらにふたつの点について論じてみよう。ひとつは、有機体内部の努力が対象の中身と同一化されることである。先に示したように、こうしたことは、有機体が自分の努力の中身を対象のなかに投影していることを意味しているわけではない。対象の抵抗は、有機体の働きかけとともに生じるのだが、有機体としての幼児のなかでは、物に圧力を加える反応が存在しているだけではなく、中枢神経系の統合を通じて、物に圧力を加えている当の手にたいして、もう一方の手が圧力を加えるという反応が呼び起こされるのである。有機体は自分自身に働きかけるが、その場合の反応は、物にたいして示す反応と同じものである。したがって、事物は、まさにそれが有機体に反応するかのような反応傾向を、有機体のなかに呼び起こすのである。われわれが最近学んだことだが、高等な生命体における中枢神経系の役割というもの、有機体のなかで潜在的にはあらゆる反応をそれ以外の反応に結びつけることにあるのだ。ある意味で、どんな反応も、神経の支配と抑制の相互関係によって、相互に係わり合っているのである」(11)。

幼児は物に圧力を加えるが、この努力が物の中身と同一視されるのである。幼児は自分の努力を物のなかに投影するのではない。投影などという高度に抽象的なことは、十分成長し十全な自我を獲得した後の話しである。幼児にとっては自分の努力と同じものがあくまで対象のなかにあって、こちら

にも働きかけるものとしてあり、そうして対象は内部をもつのである。つまり、両手で互いに圧力をかけあうような事態が、幼児と物との間に生じるのである。幼児が物に圧力をかけているときは、物の方も同時に幼児の方に圧力をかけてくるのであるが、つまり幼児がそうしているときというのは、幼児のなかに自分への物の働きかけという反応が呼び起こされているのだ。役割取得の機構によって、他者のふるまいが幼児のなかに特定の反応を呼び起こすのと同じように、物もそこにあるだけで他者と同様に幼児のなかに特定の反応を呼び起こすのである。ミードはここで中枢神経系について論じているが、これは反応という概念によってここでの議論をふくらませる関係上、人間の行為の特殊性を際立たせる意味で取り上げられている。進化論の影響である。

以上の議論が以下の文章で簡潔にまとめられている。「対象は、有機体の働きかけにたいする直接的な抵抗として現前している。けれども、対象は、内部をもたなければひとつの対象としては存在しない。対象が内部をもつのは、それが有機体のなかにそれ自身の反応を呼び起こし、そうして対象の抵抗に対応した有機体の反応を呼び起こすときである。対象のこうした性質は、有機体のなかに呼び起こされるものとしては、硬さや抵抗の感覚として現われる」。すなわち、「対象は、有機体のなかに、物的事象にたいする有機体の側の反応だけでなく、こうした反応を呼び起こす当の対象それ自体の反応も呼び起こすということである」。つまり、対象としての物的事象というのは、有機体のなかに二重の反応、すなわち有機体自身の物にたいする反応と、有機体が物が示すと想定する物自体の反応を呼び起こすのである。「こうしたことが行われる仕組みは、大脳にある。脊髄と延髄の仕組みによって、外界の刺激にたいして単純な反応が行われる。こうした刺激は、その求めるままに強制的である。それにたいして、大脳は、低次の反射を含む多種多様な反応を統合する器官であり、そしてとりわけ頭のなかにある視覚、聴覚といった感覚器官の中枢である。こうした統合過程においては、多種多様な代替的な結合関係が存在するが、統合過程が必然的にもたらす抑制にたいし

ても、それに反応する代替結合が存在する。こうしたことこそ、反応の遅延をもたらし、反応を選択することを通じて適応をもたらす」(12)。

神経生理学的な話しになってきたが、ミードはダーウィンの進化論を積極的に受け入れ、それにもとづいて西洋形而上学を乗り越えようとしているのでこういった話しになる。大脳という複雑な神経系があることによって、有機体はそれまでに蓄積してきたさまざまな反応を刺激にたいして一挙に行うのではなく、もちろん、抑制されたかたちで反応は呼び起こされるのだが、多くは行為に至る前に抑制され、特定のその場で必要な反応だけが解発されるのである。人間は、視覚や聴覚によって離隔対象を刺激として認識し、これが経験の蓄積によってもたらされたさまざまな反応を呼び起こすが、すべて反応することはなく、多くは抑制、遅延化され、これが知覚の対象になる。これが中枢神経系の役割である。したがって、実際に行うことだけでなく、知覚にとどまるだけで、実際には行わないことにも神経系は係わるのだ。

物の意味が成立するのには抑制が鍵になっている。「物質の領域に目を向けると、物の重さが手やそれ以外の身体表面に加える抵抗と、離隔している場合にそれを操作しようとする傾向が、さまざまに組織化されている。たとえば、遠くにあるテーブルのうえの本を取り上げる傾向というものがある。本のかたちと抵抗は、ある意味で、本を見たときに有機体のなかですでにある適応のうちに存在している。私が言いたいのは、離隔経験のなかにある抑制された接触経験が、物的対象の抵抗の意味をかたちづくっているということなのである。抑制されたそうした接触経験は、まず第一に、実際に神経支配を受けた、あるいは神経支配を受ける見込みのある反応に対立したものとしてある。それらは、反応が行われる領域において競合要因になるのである。それらはまた、行為全体の枠組みのなかで、実際の反応を条件づけている。私は、いまとりわけ、離隔経験において物質をつくりあげることになる反応について語っているのである。もし私が遠くに本を見れば、操作に係わる無数の反応が呼び起こされるわけだが、それはたとえば、いろいろな仕方ですそれを掴んだり、開いたり、粉々に引き裂いたり、手を押し付けたり、こすつ

てみたり、といったさまざまなことである。本を取り上げるときでも、人は、それに専念しており、行為全体を組織化しているのである。したがって、それは、他のあらゆる反応の抑制を意味している。これら他の反応を行おうとする傾向は、抵抗があって、同じように操作できず、いま専念している反応に直接対立するのである。けれども、それら他の反応傾向は、対立しているとはいえ、いま専念している反応をやりとおす条件になっている」(13)。

遠くのテーブルに載っている本を見るということは、本にたいしてはさまざまな接触経験をすでに積んでいるので、見るだけでさまざまな反応が解発される。それこそ、掴んだり、手を押し付けたり、こすったりといったことをしたときの経験にもとづく反応だが、見るだけではそうした反応は抑制されている。本をただ見るだけという離隔経験のなかにあるこうした抑制された接触経験こそが、物的対象の抵抗の意味をかたちづくっている。こうした抑制された反応は、ただ漠然と本を見ているという現在の行為に対立しているが、このように、本が示す抵抗の意味をなしているのである。だから、接触経験にもとづく抑制された反応は、したがって、ただ漠然と本を眺めるという行為の条件になっているのだ。行為というのは、多くのさまざまな反応の抑制のもとで、現に専念している特定の方向に向かうものだが、特定の方向に向かう行為は、そうしたさまざまな反応に条件づけられている。さまざまな可能的な反応が組織化されることによって特定の行為に専念できるのだ。未知のものに遭遇したときに途方にくれるのはそのためだ。「実際に行われないことこそ、実際に行われることを絶えず明確なものにしていくのである。われわれが反応する対象の質料 (matter) というのは、実際には行われないことのなかにある抵抗のことなのである」(14)。この質料は、形相、質料の質料である。西洋哲学の伝統的概念である質料がこのように有機体の具体的な経験から論じられているのである。蓄積された接触経験の抑制は、いま専念している行為の条件になってそれを意味づけているが、こうしたことこそ質料と伝統的に言われてきたことの内実なのだ。

「有機体にとって世界が存在するかぎり、またそれが有機体の環境である

かぎり、世界は、それにたいする有機体の反応のなかに反映されている。われわれが実際に接触するようになるものが、有機体にたいして存在している。けれども、われわれを取り巻くもののうち、われわれがよりどころにしたり、操作したりできないものの方が断然多いのである。つまり、そうしたものは、時間的、空間的にわれわれから離れているのであるが、それでもそうしたものも、われわれがその場に居合わせたり掌中にしたりするものとの連続性というかたちである種の内容をもっているのである。こうした離隔対象は、われわれのなかに、それに向かっていったり、離れたり、あるいは操作したりする直接的な反応を呼び起こすだけではなく、われわれ自身のなかからわれわれに働きかけてくる対象を、われわれのなかに呼び起こしするのである。私はずっと、こうした外部にある事物の内的特徴を経験のなかに生じさせる神経の仕組みを明らかにしようとしてきたのである」(15)。

このように、世界は有機体の反応としてとらえられている。われわれは、離隔対象にとりまかれているが、時間的空間的に徹底して離隔して接触可能ではないものの方が圧倒的に多いのは確かである。それでも、現実接触可能なもののある種の連続性において内容をもったものとしてとらえられる。ローマ時代の主食であった小麦は、目の前にある小麦との連続性において把握可能なのだ。もちろん、品質は当然異なるだろうが、小麦はあくまで同じ小麦であって同じものとして把握可能である。つまり、前にも書いたが、離隔対象は、有機体のなかに接触経験をもとにしてそれに対応しようとする反応を呼び起こすだけではなく、対象の方から有機体のなかに働きかけてくる反応を有機体のなかに呼び起こす。つまり、離隔対象は、有機体のなかに二重の反応を呼び起こすのである。二番目の反応は有機体が想定する対象の働きかけではなく、文字通り対象の方から働きかけてくるという反応なのである。これらは、脳の中枢神経系の進化によってもたらされたものであり、この仕組みがどうなっているのか、これを哲学の言葉で説明しようとするのがここでのミードの仕事なのである。

続く

註

- (1) George Herbert Mead, *The Philosophy of the Present*, 1932, University of Chicago Press, pp.153-4.
- (2) *ibid.* p.154.
- (3) *ibid.* pp.156-7.
- (4) George Herbert Mead, *The Individual and the Social Self*, ed. By David L. Miller, 1982, The University of Chicago Press, pp. 156-7.
- (5) George Herbert Mead, *The Philosophy of the Present*, 1932, University of Chicago Press, pp.119-20.
- (6) *ibid.* pp.120-1.
- (7) *ibid.* p.121.
- (8) *ibid.* pp.121-2.
- (9) *ibid.* p.122.
- (10) *ibid.* pp.123-4.
- (11) *ibid.* pp.124-5.
- (12) *ibid.* pp.125-6.
- (13) *ibid.* pp.127-8.
- (14) *ibid.* p.128.
- (15) *ibid.* pp.128-9.